

# ハワイにおけるピジン英語の発達に見る 日本の英語教育の可能性（Ⅱ）

——ハワイ英語の発音と強勢に焦点をあてて——

本 多 吉 彦\* 鈴 木 邦 成\*\*

## The Development of Pidgin English and its Possible Application to English Language Education in Japan Part II

A Study of Hawaiian Pidgin English with a Focus on Pronunciation and Stress Patterns

Yoshihiko Honda and Kuninori Suzuki

**要 旨** 本稿ではハワイにおけるピジン英語を分析、考察することによって外国語としての英語を学習する最善の方策を探っていくことを視野に入れ、まず標準英語の変種であるピジン英語全般の特徴を中心に分析し、ついでハワイの入植者、現地人が習得したピジン英語のスピーチ形態やその音韻規則、イントネーションにおける標準米語との相違について考察していく。さらに、日本人の話す英語とハワイのピジン英語の共通点について考察し、外国語としての英語学習者の課題を整理していくこととする。なお本稿の続きとなる『ハワイにおけるピジン英語の発達に見る日本の英語教育の可能性（Ⅲ）』では、ハワイにおける英語学習の歴史と文法を踏まえて、日本人の英語学習者にとっての最適な英語学習法を詳細に考察していくこととする。

### 1. はじめに

ハワイにおいて使用されている英語は、米国本土で使用されているいわゆる一般アメリカ語 (General American) とは、発音、文法、語彙など、さまざまな点で異なっていることが多くの専門家から指摘されている。

これはハワイ原住民や日本人などのアジア系移民が深い文化的なコミュニケーションではなく簡便な伝達的手段として英語を用いた結果である。さらに原住民、移民などの非アングロサクソンの母国語の干渉を受けてピジン英語として発達した結果でもある。こうした点を踏まえながら、本稿においてはハワイ英語における音声学上の特徴を中心に分析し、標準的な米語との差異について検証していくことにする。

---

\* 本学助教授 英語・英語教育

\*\* 本学非常勤講師 英語・英語教育

## 2. 研究の意義

英語やフランス語は世界各国で話されている。例えば、「標準的なイギリス英語」、「標準的なアメリカ英語」、あるいは「標準的なオーストラリア英語」などが存在するが、その多少周辺の言語として、ピジン、クレオールと呼ばれる言語形態が存在する。

ピジンやクレオールの歴史は古いが、十分に発展した「標準的な言語」と比べると、そうした周辺の言語についてはまだよくわかっていない。ピジンやクレオールについての歴史的な記録は、決して多くはないし、それらについての研究も第二次世界大戦後に、ようやく始まったばかりともいえる。逆にいえば、ピジンやクレオールの重要性に対する認識が高まってきたのは近年になってからのことなのである。

例えばハイムズは、ピジンやクレオールは冠詞、連辞、活用といった言語的特徴が欠如していることが多いために、「正しい言語」とは見なされず、研究の対象としてはふさわしくないという間違った認識が示されていたことが研究の遅れの主要因と指摘している<sup>1)</sup>。また、ハイムズは、「ピジンとクレオールは派生した環境においては周辺のなものであるが、そうした周辺言語は言語の本質を理解するうえで重要となることであり、多くの人々の生活の軸となる言語である」とも述べている<sup>2)</sup>。

こうした指摘を踏まえ、周辺言語の研究を充実させることにより、「言語とは何であるか」という命題に対して社会言語学的視点からの解答を導き出し、同時に周辺言語の特徴を分析することによって、そうした周辺言語と類似点、共通点が多いと考えられるノンネイティブスピーカーが習得する「外国語としての標準的な言語」に対する効果的な学習法を考察していく土台を作り上げていくことを視野に入れている。

## 3. ピジンとクレオールの定義

ホルムはピジンを「共通の言語を持たない人々の間で接触が広がることで生じる縮小化された言語」と定義している<sup>3)</sup>。また、ウォードハウはホルムの定義を踏まえたうえで、「ピジンとは、それを母語として用いる人々がいない言語のことで、第一言語としてではなく、接触言語として用いられるもので、つまりコミュニケーションをしたいと望む人々がそうできるように簡単なコードを見つける、あるいは共通のコードを間に合わせに作らなければならないような多言語的状況での産物で、通常の言語が縮小化されたもの」と考え、「文法と語彙は単純化されるが音韻的な変種は豊富で、接触する人々が求める必要性に応じての語彙が混在している」という点についても指摘している<sup>4)</sup>。

他方、クレオールは「新世代にとっての第一言語となったピジン」と定義されることが多い。クレオールについては、それを母語とする者もいる。すなわち、ピジンはクレオールの初期段階に関与しているものであり、ピジンの発展型がクレオールになっているケースが多い。ただし、全てのピジンがクレオールとなるわけではなく、また、ピジンとクレオールが同じ次元で論じられることもある<sup>5)</sup>。

## 4. ハワイ英語の概略

### 4.1 ハワイ英語の定義

本論文でいうところのハワイ英語とはハワイにおいてピジン化、あるいはクレオール化され、発達した英語のことを指す。ただし場合によっては、ハワイ英語はハワイにおける標準英語の変種としての英語方言を意味することもある。

また、ウォードハウは、ピジンとクレオールは明確ではないが赤道地帯、それも海に面している場所や簡単に海に出られる場所に多く分布していると指摘している。彼の説に従えば、ハワイにおける現地人が使用する英語はピジン、あるいはクレオールの地理的分布条件を満たしていることにもなるわけである<sup>6)</sup>。

### 4.2 ハワイ英語の発達

ハワイ諸島において英語が初めて聞かれたのは1778年にキャプテン・ジェームズ・クックがカウアイ島に到着したときであった。以後まもなくハワイ諸島において太平洋、特に日米、日中貿易の中継拠点として発展していくこととなった。そしてその過程で貿易、商業に使いやすいかたちで英語がピジン化し、発達していくこととなった<sup>7)</sup>。

### 4.3 ハワイ英語におけるスピーチの形態

ハワイ英語におけるスピーチの形態は、(1)ハワイ移民のピジン英語、(2)初期ピジン型英語、(3)ネオピジン型、(4)ハワイ標準英語の4つの型に分けて考えることができる<sup>8)</sup>。

#### 4.3.1 ハワイ移民の英語

ハワイ入植初期においてプランテーションで働いていたアジア移民などが話していたピジン英語は、発音、文法、語彙について独自の特徴が見られた。しばしば冠詞、前置詞、助動詞、接続詞、to不定詞などが省かれた。こうした語は通常、標準英語では強勢が置かれることがない。学校教育で英語を学ばず、日常生活で耳に入る音を聞き取ることにより英語を身につけていくというプロセスを辿る教育レベルの低い移民ゆえ、強勢の置かれる語を積極的に聞き取り、また強勢の置かれない語を自然に聞き取ることがなかった。そのために自らの会話においてもそれらの語がスピーチの構成において欠如するということになったと考えられるわけである。

#### 4.3.2 初期ピジン型英語

ハワイの移民労働者たちは共通のピジン英語を有していた。初期の中国系移民は独身男性が中心となって、ハワイに移住しプランテーション農業に従事する過程で現地人などと結婚し、家庭を持ち、中国語、ハワイ語のいずれよりも単純なかたちのピジン英語を日常的に用いるようになった。そして移民労働者の子供たちはピジン英語を母語として育てられることになった。子供たちは学校教育において自らのピジン英語を土台とするかたちで言語習得していくことになる。その結果、ク

レオール型の英語を話す集団が拡大していくことになった。

### 4.3.3 ネオピジン型

第二次世界大戦以降，社会学者や社会言語学者の多くはハワイにおけるピジン型英語が世代を重ねることにより，規則性を整えたネオピジン型英語に発達してきているのを確認している。

### 4.3.4 ハワイ標準英語

英国の英語と米国の米語が異なるように，また米国西海岸と同東海岸の英語に地域差が確認されるようにハワイで話される標準的な英語は語法，語彙，発音などにおいて他地域とは異なる独自の特徴が見られる。

## 5. ハワイ英語の特徴

### 5.1 音声学上の特徴

#### 5.1.1 発音

英語は米国，英国，オーストラリア，ニュージーランド，カナダ，南アフリカ，ジャマイカなどの多くの国で話され，英語圏の人口は約4億人といわれている。ただし，同じ英語でありながら，母語とする話者でも国によって発音が多少異なる。

また同一国でも地域差は存在する。例えば，英国の代表的方言であるスコットランド英語では，レーパーの研究によると，スコットランド英語では子音は25または26で母音は13または14となっているが，標準的なイギリス英語では，24の子音と20の母音を持ち，両者の個音の発音とかぶせ音素の相違点も明らかにされている<sup>9)</sup>。

以上の点をも踏まえながら，以下でハワイ英語の音声学上の特徴についてまとめていくことにする。その際，音声表記は国際音声字母に基づくことにする<sup>10)</sup>。

ピジン英語の特徴として文法や語彙は簡略化，縮小化されるが，音声面では変種が増え，豊富になるという特徴も見受けられる。

ハワイ英語の音韻規則は標準的な米語と異なる。こうしたハワイ標準英語とハワイ英語との差異は以下の対話文において顕著に表れている<sup>11)</sup>。

#### [Conversation between two male students]

Boy A: Ey, Marcus, wanna go show tonight?

Boy B: Show? Where?

Boy A: How's Waikiki?

Boy B: Waikiki! Shee! All blads, eh?

Boy A: Where you like go then?

Boy B: Me, I no care ... any place ... up to you. What show you like go?

Boy A: Ah ... hope to go Waikiki though.

Boy B: What get?

Boy A: Chee, I think Peyton Place was playin, or something like 'at.

Boy B: Peyton Place! Ey, ey, good movie eh dat.

Boy A: Yeah ...

Boy B: Us go then.

Boy A: Yeah, may as well go cause, ah, nothing to do tonight.

Boy B: Okay. You come pick me up?

Boy A: Okay. About what time?

Boy B: Up to you!

Boy A: Ah, about seven o'clock.

Boy B: Okay.

Boy A: Okay.

Boy B: Easy!

**[Conversation between two female students]**

Girl A: We goin' have one party ... I like you come, eh?

Girl B: For what?

Girl A: Must goin' be one jam session.

Girl B: Where the kind goin' be, though?

Girl A: Puamana Day Care Center.

Girl B: What kind food you folks goin' get?

Girl A: Ah ... like laulus, some drinks, and cookies, ice cream, and ah, all kind can think of.

Girl B: The kind records ... what kind you folks goin' get?

Girl A: All rock and roll.

Girl B: An' the guests ... what kind?

Girl A: Ah, let's see. Hardly any haoles, an' some school friend ... Makaha Vultures, the AC Club,  
an' some friends you don't know.

Girl B: The kind Makaha Vultures ... where they live?

Girl A: Makaha ... of course! All over the island ...

Girl B: Well ...

Girl A: Not all over the island ... some Waianae and some Makaha.

Girl B: What time the party goin' be?

Girl A: Around ... let's see, I don't know. I tell you bumbye.

Girl B: Bumbye!

Girl A: I got tell my mother.

Girl B: What I goin' tell my mother? My mother tell, "What kind party this goin' be? What time? No  
more time?"

表1 Missing Consonants and Vowels

資料提供者	Missing Consonants	Missing Vowels
Boy A	[f] [v] [z] [dʒ] [ð] [r]	[u] [ɔɪ]
Boy B	[ŋ] [f] [z] [s] [dʒ] [θ] [ð] [r]	[u] [au] [ɔɪ]
Girl A	[z] [θ]	[u] [ɔɪ]
Girl B	[ŋ] [z] [dʒ] [θ] [ð]	[u] [ɔ] [ɔɪ] [au]

(source) Carr, Elizabeth Ball. *Da Kine Talk*. (Honolulu: University Press of Hawaii, 1972) 48-50.

以上の会話について音韻規則の特徴をまとめたものが表1である。これらの会話において子音、母音の多くがハワイ英語においては標準英語以上に欠落し発音されない傾向が顕著に見られる<sup>12)</sup>。

### 5.1.2 音韻規則

カーの指摘する上記の男女の会話における音韻規則の特徴をさらに整理すると以下のようになる<sup>13)</sup>。

- (1) ハワイ英語には標準的な米語の発音と比較して独特な特徴を持っている。米語は強勢のある音節だけが同じ長さで発音されるがハワイ英語においては、音節がおおよそ同じ長さで強さで強勢される。
- (2) thの綴り字に見られる [ð] [θ] は有声音においては [d] で発音され、無声音においては [t] で発音される。
- (3) 語尾の [l] はしばしば [o] または [ol] と発音される。
- (4) 母音の後の [ə] はしばしば省略される
- (5) tはrの前では [ʃ] と発音され、dはrの前では [dʒ] と発音される。
- (6) rまたはtrの前のsは [ʃ] と発音される。
- (7) 語尾のrは時々違う母音で発音される。

### 5.2.3 イントネーション

カーはハワイ標準英語のイントネーションにおいて、疑問文のイントネーションは下降調イントネーション、つまりいわゆる尻下がりのイントネーションとなる点について注目した。そして、この特色は、ハワイの土着言語と類似するということを指摘している。

また、「ハワイ英語は標準的な米語の発音と比較して独特な特徴を持っている。米語は強勢のある音節だけが同じ長さで発音されるが、ハワイ英語においては、音節がおおよそ同じ長さで強さで強勢される」という点についても指摘している。

カーはまた、ハワイ標準英語のイントネーションについて、以下の点に着目している<sup>14)</sup>。

### (1) Syllable-Timed Rhythm

ハワイ英語はスタッカート（断音）に切り刻む（choppy）調子で syllable-timed rhythm である。これに対して標準的な米語の発音は stress-timed rhythm で強勢のある音節が強く長く発音される。この音節がほぼ同じ長さで強さで強勢されることがハワイ英語の大きな特徴である。

また以下の例文にあるように標準英語でしばしば単音節や弱形をとる助動詞 do, 代名詞 you, 前置詞 to, 定冠詞 the は省略されたり, 不定詞をつくる want to が wanna になったりすることもハワイ英語の発音の特徴と考えられる。

（例文）

標準英語 : Do you want to go to the show tonight?

ハワイ英語 : Wanna go show tonight?

### (2) Yes-No Question におけるイントネーション

米語の yes-no question においてはセンテンスの末尾は上昇調のイントネーションとなる。これに対してハワイ英語においては高い音調でセンテンスがはじまり, この音調を文の最後の語の音節まで維持し急に下降するという特徴を持っている。しかし疑問代名詞を用いた疑問文においては米語と同じイントネーションとなる。

ハワイ英語において yes-no question のイントネーション・パターンが下降調である理由は, ハワイの人々が当初, イギリス英語を頻繁に耳にしたとも考えられる。イギリス英語においてはハワイ英語と同様に yes-no question においてはセンテンスの末尾ではイントネーションが下降調となるからである。以下を参照にされたい<sup>15)</sup>。

イギリス英語	: Are you Bill Jones ?	3 - 2 - 1	rising
米語	: Are you Bill Jones ?	2 - 3 - 3	rising
ハワイ英語	: Ey, you Bill Jones ?	3 - 1 - 1	falling

カーは, この点について「Madeira や Azores で話されているポルトガル語の影響を受けているとも考えられている」とも述べている<sup>16)</sup>。

## 5.2.4 強勢

英語の強勢は英語が語順, 統語によりまとめられている言語であるということと大きく関係し, 語間の統語関係を示すものとされている。したがって助詞で結び付けられる日本語の場合は強勢と語順に相関関係が必要ないので個々の音にアクセントは必要とならないが英語の場合には強勢が会話において果たす役割は大きい。

この点を踏まえると, 米語は強勢のある音節だけが同じ長さで発音されるが, ハワイ英語におい

ては、音節がおおよそ同じ長さで強さで強勢されるという特徴を持つことは実に興味深い。また、dictionary, hurricane などの強勢については、標準的な英語では第一音節に強勢をとるがハワイ英語においては強勢の位置が移動される。

## 6. 日本人の英語との共通点を踏まえての今後の課題

最後に日本人の話す英語とハワイのピジン英語の共通点をいくつか挙げ、ハワイ人の英語習得の過程を疑似体験することで日本人の英語力が伸びる可能性があるということを指摘しておきたい。以下の表2はハワイ英語と日本人英語の基本的な共通点をまとめたものである。

ハワイ英語においては、例えば、th[ð] の発音は、[d] で代用される。周知の通り、th[θ][ð] の発音は英語以外にはほとんど存在しない。そのため、インド英語や欧州大陸英語では、th[θ] は [t] で代用されることも多いなど、ハワイ英語以外でも他の音を代替的に使用することで間に合わせるという事例が多々、報告されている。

また、イントネーションや強勢についても標準的な英語とは異なる変種としての特徴を有している。こうしたピジン英語に見られる音声学的な特徴の生成には音声の正確性よりもコミュニケーション性を重視した歴史的、文化的背景が大きく影響している。

他方、我が国の英語教育においては従来、正確性については学習者にその履行が徹底して奨励されていたがコミュニケーション性を重視しての英語教育法はどちらかというと変則的な教育方法と見なされてきた。

しかしながらハワイ英語の事例などを踏まえれば、日本人の英語教育においても、正確性よりもコミュニケーション性を重視した実用度の高い英語をひとつの選択肢として、戦略的に学習者に提示する必要があることが理解できるであろう。

したがってハワイ英語の実用性、コミュニケーション性を十分に検証し踏まえたうえで、日本人の英語学習法に生かしていくことで従来、正確性を重視した伝統的な語学学習法から脱却できず、そのために実用性やコミュニケーション性が低いといわざるを得なかった日本における英語学習法

表2 ハワイ英語と日本人英語の共通点

共通点	ハワイ英語の例	日本人英語の例
th の発音	有声音においては [d] で発音され、無声音においては [t] で発音される。	日本語に英語の th 音と同じ音素が存在しないために that→dat think→sink と発音される傾向にある。
母音の後の [ə] の発音	母音の後の [ə] はしばしば省略される。	farm に代表されるように母音の後の [ə] は発音されない。
強勢	音節がおおよそ同じ長さで強さで強勢される。	子音+母音による拍が、音の最小単位として考えられている日本語は常に母音で終わる。この影響を受け英語が抑揚の少ないフラットな英語になる。
イントネーション	リズム・パターンはスタッカート（断音）調で切り刻む（choppy）調子。	日本語が音の長さが一定という特徴があるため、母国語の干渉を受け、日本人の英語のイントネーションは日本語と類似する。

（出所） Carr, Elizabeth Ball. *Da Kine Talk*. (Honolulu: University Press of Hawaii, 1972), 及び佐伯智義『科学的な外国語学習法』（東京：講談社, 1997年）を参考に作成



に効果的な選択肢を加えることが可能となるわけである。

以上を念頭に置き、本稿の続きとなる『ハワイにおけるピジン英語の発達に見る日本の英語教育の可能性 (Ⅲ)』においては、日本におけるこれまでの英語教育を総括し、ハワイ英語の実用性を十分に参考にしたうえでの英語学習法を検証していくこととする。

## 7. 小 括

本稿においてはハワイにおけるピジン英語の分析、考察を進めた。まず標準英語の変種であるピジン英語全般の特徴を中心に分析し、ついでハワイの入植者、現地人が習得したピジン英語のスピーチ形態やその音韻規則、イントネーションにおける標準米語との相違について分析した。

その結果、ハワイにおけるピジン英語は、個々の音の発音、強勢、イントネーションについて標準英語とは異なる特徴を持つことが確認された。無論、標準英語とのさまざまな面における相違点は、多種多様な世界各地のピジン英語からも確認されている。ハワイ英語もそうしたピジン英語のひとつと考えられるわけである。

しかしながら標準英語とは異なる変種の英語とはいえ、ハワイ英語は高い実用性、コミュニケーション性を有している。今後、ハワイ英語の実用性、コミュニケーション性を十分に踏まえようとして従来は正確性ばかりが重視される傾向にあった日本における英語教育に新しい方向性を示唆できると考えている。

以上を踏まえ、『ハワイにおけるピジン英語の発達に見る日本の英語教育の可能性 (Ⅲ)』においては、ハワイ英語との共通点を十分に考慮したうえでのこれまでとは異なる角度から英語学習の効果をあげる方策を体系的に考察していくこととする。

### Works Consulted

- Andrew, Lorrin. *A Dictionary of the Hawaiian Language*. Honolulu: Board of Commissioners of the Public Archives of the Territory of Hawaii, 1922
- Carr, Elizabeth Ball. *Da Kine Talk*. Honolulu: University Press of Hawaii, 1972.
- Holm, J. *Pidgins and Creole*. Cambridge: Cambridge UP, 1988
- Hymes D. H. *Pidginization and Creolization of Languages*. Cambridge: Cambridge UP, 1971.
- Pride, J. B. *New English*. Rowley: Newbury House, 1982.
- Kuykendall, Ralph. *The Hawaiian Kingdom*. Honolulu: University Hawaii Press, 1967.
- Todd, Loreto. *Pidgins and Creole*. New York: Routledge and Kegan Paul, 1974.
- Valdman, Albert. *Pidgins and Creole Linguistics*. Bloomington: Indiana University Press, 1977.

### 邦語参考文献

- 池澤夏樹『ハワイ紀行 完全版』, 東京: 新潮社, 2000年
- 佐伯智義『科学的な外国語学習法』, 東京: 講談社, 1997年
- ロナルド・ウォードハウ『社会言語学入門』, 東京: リーベル出版, 1994年
- 矢口祐人『ハワイの歴史と文化』, 東京: 中央公論新社, 2002年
- 山中速人『ハワイ』, 東京: 岩波書店, 1993年
- 東後勝明『日本人に共通する英語発音の弱点』, 東京: ジャパンタイムズ, 1994年

## 注

- 1) Hymes D. H. *Pidginization and Creolization of Languages* (Cambridge: Cambridge UP, 1971) 3.
- 2) *Ibid.*, 3.
- 3) Holm, J. *Pidgins and Creole* (Cambridge: Cambridge UP, 1988) 4-5.
- 4) ロナルド・ウォードハウ『社会言語学入門』(東京:リーベル出版, 1994年) 79頁。
- 5) 前掲書, 75頁~117頁。
- 6) 前掲書, 84頁~92頁。
- 7) Carr, Elizabeth Ball. *Da Kine Talk* (Honolulu: University Press of Hawaii, 1972.)3-7.
- 8) *Ibid.*, 14-77.
- 9) 佐藤 寧, 佐藤 努『現代の英語音声学』(東京:金星堂, 1997年) 163頁~170頁。
- 10) Ladefoged, Peter. *A Course In Phonetics* (Orlando, Florida: Harcourt and Company, 1996)を参考にした。
- 11) Carr, Elizabeth Ball. *Da Kine Talk* (Honolulu: University Press of Hawaii, 1972.) 45-48.
- 12) *Ibid.*, 49-50.
- 13) *Ibid.*, 45-50.
- 14) *Ibid.*, 50-54.
- 15) *Ibid.*, 53.
- 16) *Ibid.*, 53.